

肯定的／否定的対人関係のストレス媒介効果

橋 本 剛¹⁾

問題と目的

対人関係はさまざまなストレスの悪影響を緩和し、個人の精神的健康に寄与しうることが知られている。そのような機能を持つ対人関係は「ソーシャル・サポート」と総称され、これまで多くの研究 (e.g., Barrera, 1986; Sarason & Sarason, 1985; 浦, 1992) において、その効果が指摘されてきたが、その影響力はどのような指標を用いるかによって異なることも指摘されている。この問題に関して、Cohen & Wills (1985) は、社会的包絡の程度に基づくサポート指標が直接効果 (いかなるときもサポートはストレスの悪影響を緩和する) を、サポートの利用可能性に基づく指標が緩衝効果 (高ストレス時のみにサポートはストレスの悪影響を緩和する) をもたらしやすいことを指摘している。すなわち、ストレスの有無に関わらずネットワークの存在自体がある程度は精神的健康に寄与するのであるが、いざストレスが生じた際は、ネットワークからサポートを得られるか否かが重要となる、と言えよう。

その一方で、対人関係がストレスをもたらす、個人の精神的健康に悪影響を及ぼすことも確かである。対人関係上のライフイベント (離別や葛藤など) は、社会的再適応評価尺度 (Holmes & Rahe, 1967) などのライフイベント尺度でも、相対的にかなりストレスフルなイベントであるとされている (Thoits, 1982; Shinn, Lehmann, & Wong, 1984)。日常のストレスにおいて、対人ストレスは非対人ストレスより相対的に否定的影響力が大きい (Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling, 1989; 長根, 1991; 岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992)。また、サポートと同様、対人関係の否定的側面もさまざまな身体的／精神的症状との関連が指摘されており (橋本, 1999)、対人関係が健康に対して否定的であるとき、その影響力は決して軽微なものではない。サポート研究においても、対人関係の肯

定的側面を強調するのみならず、その否定的側面も考慮すべきであることは常々指摘されている (e.g. Coyne & DeLongis, 1986; House, Landis, & Umberson, 1988; Rook, 1985)。しかし、このような対人関係の否定的側面、すなわち否定的対人関係は、ソーシャル・サポートほどには研究が蓄積されておらず、概念定義のコンセンサスすら得られていないのが現状である。それゆえ、ソーシャル・サポート研究における直接効果と緩衝効果のように、否定的対人関係が精神的健康に影響を与えるプロセスについては、未だ十分には議論されていない。それでは、否定的対人関係は精神的健康に対してどのような影響を与えるのであろうか。

ストレスの認知的評価・対処理論 (Lazarus & Folkman, 1984) をはじめとする心理社会的ストレス研究においては、一連のストレス・プロセスは大まかには、精神的健康状態を変動させる直接要因としてのストレス、その直接要因の影響力を左右する媒介要因、そしてその結果としての精神的健康やストレス反応によって構成されると考えられる (Figure 1 の点線囲み)。このプロセスを中心に、対人関係が精神的健康に及ぼす影響を考えると、まずその肯定的側面すなわちソーシャル・サポートは、前述のように、直接的に精神的健康に影響する要因としてのサポートネットワーク (すなわち直接効果, Figure 1 のパス①) と、ストレスの影響力を低減するストレス緩衝要因 (緩衝効果, 同パス③, Figure 2 左図の影響力を持つ) として位置づけられよう。なお、サポート提供がかえって悪影響を及ぼす場合もあることが先行研究で明らかにされており (e.g., Antonucci, 1985; Barrera, Chassin, & Rogosch, 1993; Wortman & Lehman, 1985)、その場合、対人関係の影響はパス③ではなくパス④に該当することとなるが、このケースは例外的なものとして、本研究では扱わない。

それに対して否定的対人関係は、まずは一連のストレス・プロセスの始発点であるストレス (= 対人ストレス) として、精神的健康に直接的な悪影響を及ぼ

1) 現所属: 愛知産業大学経営学部

肯定的／否定的対人関係のストレス媒介効果

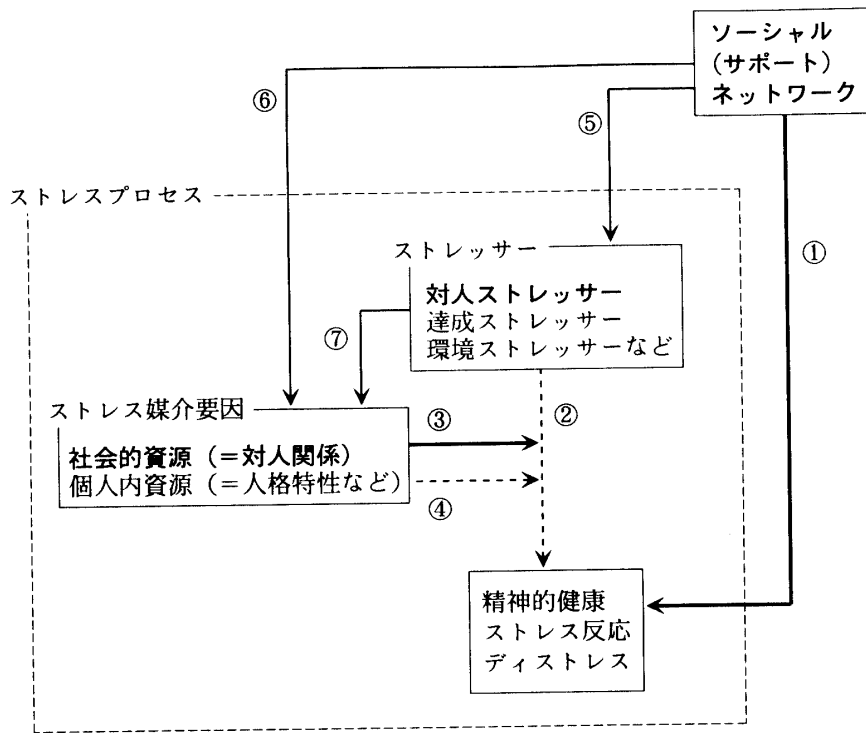


Figure 1 一連のストレスプロセスにおける対人関係の位置づけ

Note: 太字ゴシックが対人関係変数

- 対人関係が精神的健康に好影響を及ぼすと考えられるパス
- - - - - 対人関係が精神的健康に悪影響を及ぼすと考えられるパス
- その他に関連が想定されるパス (本論文では扱わない)

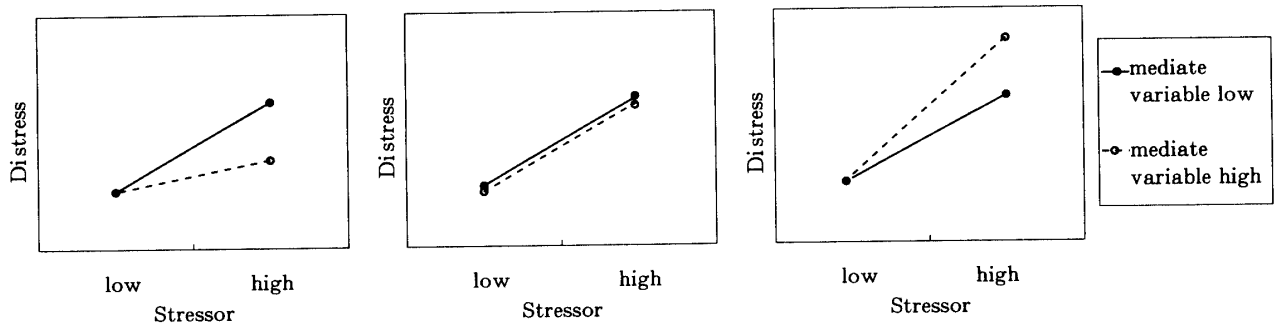


Figure 2 ストレス媒介要因の3つの効果

- 左: ストレス緩衝効果 (媒介要因の存在はストレスターの悪影響を低減する)
 - 中: 媒介効果なし (媒介要因の存在はストレスターの影響力を左右しない)
 - 右: ストレス増幅効果 (媒介要因の存在はストレスターの悪影響を増幅する)
- Note: ここではいずれもストレスターによる一定の直接効果 (悪影響) が仮定されている。

すという位置づけ (同パス②) が考えられよう。実際に、否定的対人関係をストレスターとして位置づけた研究と考えられる。しかし、それに加えて、否定的対人関係を、生じた別のストレスターの影響力を左右するストレス媒介要因 (ストレス増幅要因) として位置づけること (パス④) も可能であろう。すなわち、何らかのス

トレスターが生じたとき、否定的対人関係がそのストレスターの悪影響をさらに増幅させる (Figure 2 右図の影響力を持つ) という可能性である。何らかのトラブルを抱えているときに、周囲の人々が非協力的であったり、追い打ちをかけるような行動をとることによって、そのトラブルの悪影響が一層深刻になる、ということは現実にも少なからずあり得よう。

Table 1 ストレッサーとして位置づけられる否定的対人関係を含む研究

文献	被験者	独立変数	従属変数
Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling (1989)	既婚夫婦	日常ストレッサー (含対人ストレッサー)	ムード
Hewitt & Flett (1993)	抑うつ／一般精神病患者	達成／対人ストレッサー	抑うつ
Major, Zubek, Cooper, Cozzarelli, & Richards (1997)	墮胎女性	葛藤	ディストレス, well-being
Sandler & Barrera (1984)	大学生	葛藤的ネットワーク	疾病徴候
Abbey, Abramis, & Caplan (1985)	大学生	葛藤	情緒, QOL
Lepore (1992)	大学生	葛藤	ディストレス
Schuster, Kessler, & Aseltine (1990)	既婚白人夫婦	否定的相互作用	抑うつ
Rauktis, Koeske, & Tereshko (1995)	介護家族	否定的相互作用	ディストレス, 抑うつ
Rook (1984)	未亡人女性	問題を含む対人関係	well-being
Finch, Okun, Barrera, Zautra, & Reich (1989)	高齢者	否定的結びつき	well-being, ディストレス
Fiore, Becker, & Coppel (1983)	アルツハイマー介護者	いらだちごと	抑うつ
Pagel, Erdly, & Becker (1987)	アルツハイマー介護者	いらだちごと	抑うつ, ネットワーク満足
Pierce, Sarason, & Sarason (1991)	大学生	葛藤	孤独感
Lakey, Tardiff, & Drew (1994)	大学生	否定的相互作用	ディストレス
Helgeson (1993)	心臓病患者	否定的相互作用	well-being
Horwitz, Mclaughlin, & White (1997)	青年コホート	問題的關係	抑うつ
Barrera, Chassin, & Rogosch (1993)	青年	葛藤	顕在的徴候
Vinokur & van Ryn (1993)	夫婦	ソーシャルアンダーマイニング	抑うつなどの精神的健康
Vinokur, Price, & Caplan (1996)	夫婦	ソーシャルアンダーマイニング	不安や抑うつなどの精神的健康
Holahan, Moos, Holahan, & Brennan (1997)	心臓患者	ソーシャルストレッサー	抑うつ
橋本 (1997a)	大学生	対人ストレスイベント	ディストレス

Table 2 ストレス媒介要因として位置づけられる否定的対人関係を含む研究

文献	被験者	独立変数	媒介変数	従属変数
Sandler & Barrera (1984)	大学生	ライフイベント	葛藤的ネットワーク	疾病兆候
Rauktis, Koeske, & Tereshko (1995)	介護家族	介護必要性	否定的相互作用	ディストレス
Abbey, Andrews, & Halman (1995)	夫婦	妊娠など	配偶者の軽視	結婚QOL

しかし前述のように、先行研究の多くは、否定的対人関係をストレスラーとして位置づけており、その直接効果のみしか検討していない。また、否定的対人関係がストレス媒介（増幅）要因として位置づけられる研究も僅かではあるが存在し（Table 2）、なかには増幅効果を指摘しているものもあるが、それらの研究も、否定的対人関係の概念定義が曖昧であるが故に、その測定法はまちまちである。サポートの直接／緩衝効果において指標の測定法（知覚されたネットワークなのか、実行された相互作用なのか）が重要な論点とされていることを考慮すれば、否定的対人関係の増幅効果を検討する際にも、測定法が異なる指標を設定することが必要であろう。

以上を踏まえ本研究では、ソーシャル・サポートの直接効果（Figure 1のパス①）、否定的対人関係（対人ストレスラー）の直接効果（同パス②）、ソーシャル・サポートのストレス緩衝効果（同パス③）、否定的対人関係のストレス増幅効果（同パス④）という4つの効果の有無およびそれらの相対的影響力を検討することによって、対人関係が精神的健康に及ぼす影響を包括的に検討する。また、パス④を検討するための前段階として、ストレスを増幅させ得るような、ストレスラー直面時に生じうる否定的相互作用を測定するための尺度作成も必要である。したがって、本研究の目的は具体的には以下の3点に要約される。

- (1) ストレス媒介要因としての否定的相互作用を測定する尺度の作成（ならびにその下位概念の検討）。
- (2) その尺度などを用いての、知覚／実行された否定的対人関係が精神的健康に及ぼす直接効果／媒介効果の有無の検討。
- (3) 否定的対人関係と肯定的対人関係（ソーシャル・サポート）の、ストレスに対する相対的影響力の検討。

方法

予備調査

まず、ストレス媒介要因としての否定的相互作用測定尺度の質問項目を作成するために、1999年6月、予備調査を質問紙法により実施した。調査対象は東海地区の大学生187名（男性103名、女性83名、不明1名、平均19.31歳）であった。以下の教示文による自由記述により項目が収集された。

「日常生活で生じるさまざまなできごとの中には、あなたをいらだたせたり、憂鬱にしたりする、不快なものもあるでしょう。そしてそんなとき、周囲の人たちとのやりとりが、その不快な気分をますます強めることもあるかと思います。

そこで、過去にそのような経験があった場合はその内容、そ

しても自分が問題に直面したとき、周囲の人にどのようなコミュニケーションをして欲しくないかを、例にならって、なるべくたくさん、なるべく具体的に記入して下さい。」

（例）試験の成績が悪かったとき、友だちにからかわれた

（例）失恋したとき、自分の悪かった点を指摘されるのは嫌だ

本調査

本調査は東海地区の女子短大生を対象に1999年11月から12月にかけて、質問紙法による3波縦断調査で実施された。本論文では以下の尺度を使用する。

独立変数 ①対人ストレスラー：橋本（1997b）による対人ストレスイベント（頻度）尺度の、因子分析で見いだされた3因子（対人葛藤、対人劣等、対人摩擦）の上位各5項目ずつ、計15項目で構成した対人ストレスイベント尺度短縮版。②達成ストレスラー：高比良（1998）による対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の、達成領域ネガティブライフイベント短縮版の15項目。なお、①と②は日常ストレスラー（Daily Hassles）という想定で実施されたので、最近2週間という期間設定の元で、混合して実施した。また、評定方法としては尾関（1993）を参考とし、経験しなかった場合は0点とし、経験した場合のみ、それがどの程度つらかったかを、「なんともなかった」から「非常につらかった」までの4件法で評定するという変則5件法を用いた。③ライフイベント：Holmes & Rahe（1967）による社会的再適応評価尺度（Social Readjustment Rating Scale: SRRS）の、日本人大学生による再検討を行った八尋・井上・野沢（1993）の研究において、LCU得点（Life Change Unit Score：点数が高いほど適応困難な出来事である）が高い項目を参考にして、大学生が経験しうるような質問となるように修正を施した13項目、さらに失恋と生活環境悪化を付け加えた15項目で構成された。これはストレスラーの中でも重大なライフイベントとして位置づけられる変数である。ライフイベントの影響は3ヶ月とする知見（Suh, Diener, & Fujita, 1996）に基づき、本研究ではこの質問に関しては過去3ヶ月という期間設定を行った。なお、これらはいずれも第2回調査で実施された。

媒介変数 ①ネットワークサイズ：以下の教示を提示して、日常生活におけるネットワークサイズを同定した。『普段の生活で、あなたにとって重要な人は誰ですか？好き嫌いに関わらず、あなたの現在の生活で重要である人すべてのイニシャルと、その人との関係を以下に記して下さい。ただし、少なくとも週に1度は会って話をする人に限して下さい。また、あてはまる人が9人以上いる場合は、あなたにとって重要な順

に、最大9人まで書いて下さい。あてはまる人が9人に満たない場合は、8人以下でも構いません。』②サポート／ストレイサイズ：①で挙げた人のうち、サポート／ストレイ提供者となる者が何人いるか、回答を求めた。サポート項目については Sarason, Levine, Basham, & Sarason (1983) の Social Support Questionnaire (及びその短縮版)、松崎・田中・古城 (1990) の SSQ9 を参考に作成した。ストレイ項目については Rook (1984), Finch, Okun, Barrera, Zautra, & Reich (1989), 橋本 (1997a) のネットワークストレイを参考に作成した。それぞれ7項目の計14項目で構成されている。③ストレス媒介相互作用尺度 (Stress Mediating Interaction Scale: SMIS) : 個人がストレッサーに直面したとき、そのストレスを媒介しうる肯定的／否定的社会的相互作用を測定する尺度。否定的項目については先述の予備調査、肯定的項目については Barrera, Sandler, & Ramsay (1981) の ISSB (Inventory of Socially Supportive Behaviors) を参考に作成した各20項目、計40項目で構成された。『最近およそ1ヶ月のあいだ』という期間、さらに『あなたが問題やトラブルを抱えて悩んだりストレスを感じているとき』という状況設定の元で、周囲の人(家族・友人・知人・恋人など)が、どの程度の頻度で各項目に記された内容の行動をとったか、「まったくなかった」から「しばしばあった」までの4件法で質問した。これらは、①②を第1回、③を第3回の調査で実施した。

従属変数 ①否定的情緒：渡辺 (1986) のうつ傾向尺度 (11項目) と不安傾向尺度 (7項目)。②身体的症状：同じく渡辺の心身症傾向尺度 (12項目)。いずれも5件法、全3回で実施した。ただし本研究では第3回の結果のみを使用する。

結果と考察

尺度の構成

独立変数 ストレッサー尺度の尺度構成には、第2回の調査に回答した238名中、21歳以上の2名、さらに留学生1名を除いた235名のデータが使用された。まず日常ストレッサー(対人ストレッサー／達成ストレッサー)全30項目について、対人ストレッサー／達成ストレッサーとして想定された各15項目ずつで α 係数を求めたところ、いずれも十分な信頼性が得られたので、表面的妥当性も考慮して、それぞれの合計を対人ストレッサー／達成ストレッサー尺度得点とした。また、ライフイベントは全項目いずれも経験率が低かったため、全項目の合計をライフイベント得点とした。

媒介変数 ネットワークサイズについては同定された人数を、サポート／ストレイサイズについては全項目の合計を項目数で割ったものを得点とした。ストレス媒介相互作用尺度については、第3回調査に回答した234名を分析対象とし、まず全40項目による因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、固有値の減衰状況(8.81, 5.58, 1.95, 1.52…)から2因子性と判断され、第I因子に肯定的項目、第II因子に否定的項目として想定された項目がそれぞれ高い因子負荷を示した(Table 3)。否定的項目については因子負荷量の低い項目も若干あったものの、負荷が因子間で拮抗している項目はなかったので、肯定的($M=47.52$, $SD=11.45$, $\alpha=.92$)／否定的($M=26.63$, $SD=6.58$, $\alpha=.86$)相互作用各20項目の合計をそれぞれ尺度得点として採用した。さらに、否定的項目20項目についても因子分析を行った結果、固有値の減衰状況(5.66, 2.20, 1.37, 1.30…)から2因子性と判断され、因子負荷から、「お節介」(12項目, $M=15.72$, $SD=4.47$, $\alpha=.83$)と「退却」(6項目, $M=8.16$, $SD=2.76$, $\alpha=.81$)の2つの下位尺度が設定された。これらは内容的に、「望まない干渉」と「望んでいる相互作用の非実現」と区分されると考えられる。

従属変数 第3回調査に回答した234名のデータにより α 係数を算出したところ、否定的情緒である抑うつ($\alpha=.88$)と不安($\alpha=.85$)、そして身体的症状($\alpha=.86$)、いずれも信頼性が確認されたので、全尺度項目をそれぞれ合計したものを尺度得点とした。

以上の尺度得点の平均・標準偏差をTable 4に示す。また、全3回の調査すべてに回答した被験者170名を、以降の分析対象とした。

ネットワーク、ストレッサー、ストレス媒介相互作用の関連

ストレッサー、ネットワーク、ストレス媒介相互作用の相関を求めた結果(Table 5)、サポートとストレイ、肯定的相互作用と否定的相互作用は、いずれもほぼ無相関であった。よって、全般的対人関係における肯定的側面と否定的側面は、測定形式を問わず基本的に独立であると考えられる。その一方で、サポートと肯定的相互作用、ストレイと否定的相互作用はそれぞれ有意な正の相関を示し、肯定性－否定性が同じ方向の変数は測定形式を問わず共変することも確認された。加えて、ネットワークサイズは肯定的相互作用のみならず、否定的相互作用の下位尺度である「お節介」とも正の相関(傾向)を示した。

また、ネットワークやサポートとストレッサーは無相

肯定的／否定的対人関係のストレス媒介効果

Table 3 ストレス媒介相互作用尺度の因子分析結果（主因子法，バリマックス回転）

	全項目による分析		否定的項目による分析	
	I	II	I	II
1. あなたがゆっくりできる状況を作ってくれた……………	.565	-.172		
2. あなたと似たような状況の時、どうしたかを教えてくれた……	.618	-.048		
3. あなたの気を紛らわせるようなことをしてくれた……………	.627	-.052		
4. あなたの悩みを些細なことだと言った……………	.080	.343	.210	.272
5. あなたの相談内容を周囲に広めた……………	.138	.373	.454	.034
6. もめ事が起こりそうな場面に立ち会ってくれた……………	.467	.193		
7. ありのままのあなたを認めてくれた……………	.595	-.076		
8. 相談したらあなたの考えを否定した……………	.126	.522	.445	.278
9. あなたの相談を軽く適当に受け流した……………	-.330	.551	.121	.782
10. 相談しても、曖昧ではっきりしない返事しかなかった……………	-.274	.479	.173	.573
11. あなたに期待されていることをはっきりさせてくれた……………	.579	.169		
12. あなたに敬意を持って接してくれた……………	.653	.003		
13. あなたがどうすればいいかの情報を与えてくれた……………	.685	-.074		
14. あなたの問題について、あることないことまで広めた……………	.190	.348	.501	-.075
15. 言われなくてもわかっていることまで指摘した……………	.023	.597	.575	.265
16. あなたがすべきことをそれとなく教えてくれた……………	.648	-.012		
17. あなたが状況を理解する手助けとなる情報を示してくれた……	.705	-.032		
18. あなたの問題について、意見を押しつけた……………	.061	.593	.596	.220
19. 話したくないのにしつこくあなたの悩みを聞こうとした……………	-.019	.488	.445	.245
20. いつまでもその問題のことをしつこく言った……………	.027	.542	.525	.230
21. あなたの正直な気持ちを聞いてくれた……………	.706	-.043		
22. あなたが必要なものを貸してくれたり、くれたりした……………	.483	.146		
23. あなたの問題について勝手に世話を焼いた……………	.159	.446	.522	.064
24. そのことをネタにしてあなたをからかった……………	.069	.461	.485	.126
25. あなたの気持ちに賛成してくれた……………	.613	-.087		
26. あなたの状況がわかりやすくなるようなことを言ってくれた……	.706	.016		
27. あなたに真剣に取り合ってくれなかった……………	-.213	.472	.108	.644
28. 相談したら素っ気ない態度で相手された……………	-.342	.494	.087	.729
29. 決まりきったアドバイスしかしてくれなかった……………	-.197	.493	.174	.598
30. あなたと同じ状況のとき、どう感じたかを話してくれた……………	.619	-.085		
31. 必要なときはいつもそばにいてと言ってくれた……………	.607	-.051		
32. あなたを助けてくれそうな人を教えてくれた……………	.444	.132		
33. あなたの問題について、さらに責め立てた……………	.011	.583	.543	.270
34. 相談したいのに話を聞いてくれなかった……………	-.327	.450	.128	.553
35. あなたがしたことを善悪抜きで評価してくれた……………	.535	.063		
36. あなたを元気づけるような冗談を言ってくれた……………	.617	.056		
37. 変に気を使って、かげでこそこそ話していた……………	.011	.430	.466	.127
38. 具体的なアドバイスをせずに同情するだけだった……………	-.024	.440	.265	.361
39. その悩みについてのあなたの不安をよけいあおった……………	-.083	.570	.554	.261
40. あなたが何かするのに協力してくれた……………	.676	-.047		
2 乗 和	8.10	4.97	3.36	3.25

Note : 全項目分析の因子 I 負荷 .40 以上が肯定的相互作用項目, 因子 II 負荷 .30 以上が否定的相互作用項目
 否定的項目分析の因子 I 負荷 .40 以上が「お節介」項目, 因子 II 負荷 .40 以上が「退却」項目

Table 4 記述統計量

	N	Mean	SD	Min.	Max.
ネットワークサイズ	170	7.75	1.71	2.00	9.00
サポートサイズ	170	4.47	1.66	1.43	9.00
ストレインサイズ	170	0.63	0.58	0.00	3.57
ライフイベント	168	0.75	1.22	0.00	5.00
対人ストレス	169	15.25	12.78	0.00	54.00
達成ストレス	167	12.26	10.10	0.00	58.00
肯定的相互作用	163	47.52	11.45	20.00	77.00
否定的相互作用	164	26.63	6.58	20.00	51.00
お節介	166	15.72	4.47	12.00	31.00
退却	167	8.16	2.76	6.00	22.00
身体的症状	168	21.65	7.85	12.00	44.00
抑うつ	170	26.55	8.27	11.00	53.00
不安	170	14.06	5.47	7.00	35.00

関であったが、ストレインとストレスは全般的に正の相関を示した。ただし、ストレスの種類によってその程度は異なった。まず、ストレインと達成ストレスの相関は有意傾向に留まった。これは、達成ストレスの生起が、直接的には対人関係と無関連であることによると考えられる。それに対して、ストレインとライフイベント・対人ストレスは、明らかに有意 ($p < .01$) な相関を示した。対人ストレスは言うまでもなく、ライフイベントにも対人関係上のイベントが多く含まれており、その意味でこの結果は、ストレスの弁別性を確認するものと言えよう。さらに、ライフイベントが肯定的/否定的相互作用の両方と正の相関を示している一方で、対人/達成ストレスが否定的相互作用のみと正の相関を示しているのは興味深い。加えて、否定的相互作用の下位概念である「お節介」は、対人ストレスと有意な正の相関を示したが、達成ストレスとは無相関であった。

知覚/実行されたサポート/ストレインの直接/緩衝/増幅効果

ネットワーク変数（ネットワークサイズ、サポートサイズ、ストレインサイズ、肯定的相互作用、否定的相互作用）が、ストレス（ライフイベント、対人ストレス、達成ストレス）の影響を媒介する効果を検討するため、ストレス指標のいずれかひとつを独立変数、ネットワーク変数のいずれかひとつを媒介変数、そしてストレス反応変数（身体的症状、抑うつ、不安）のいずれかひとつを従属変数とした、2要因分散分析を行った（ $3 \times 5 \times 3 = 45$ パターン、独立変数と媒介変数はいずれも平均値で高群と低群に区分）。その結果（Table 6）、すべての分析でストレスの主効果は有意（傾向）であったが、媒介変数の主効果は、否定的相互作用がすべて有意となったのみであった。さらに交互作用については、ストレインサイズを用いた分析の約半数で有意（傾向）であったが、その他に有意 ($p < .05$) な交互作用は見いだされなかった。したがって、本研究においてはストレスと否定的相互作用の直接効果、そしてストレインサイズの増幅効果が見いだされたが、サポートの直接/緩衝効果はともに見いだされなかった。

さらに、否定的相互作用の下位概念である「お節介」と「退却」のいずれかを媒介変数として、同様の2要因分散分析（ $3 \times 2 \times 3 = 18$ パターン）を行った結果（Table 7）、ストレスの主効果はいずれも有意（傾向）となり、加えて媒介変数も、15/18パターンの分析が有意（傾向）を示した。しかし交互作用については、媒介変数に「退却」を用いた2つの分析で有意となった（Figure 3; Figure 4）のみであった。よって、これらの下位尺度を用いた分析についても、ストレス及び否定的相互作用の主効果は見いだされたものの、全

Table 5 ネットワーク・ストレス・ストレス媒介相互作用の相関 (N=159-170)

	ネットワーク サイズ	サポート サイズ	ストレイン サイズ	ライフ イベント	対人 ストレス	達成 ストレス	肯定的 相互作用	否定的 相互作用	お節介	退却
ネットワークサイズ	-									
サポートサイズ	.48***	-								
ストレインサイズ	.06	-.12	-							
ライフイベント	.04	.04	.23**	-						
対人ストレス	.04	.08	.29***	.24**	-					
達成ストレス	-.01	.10	.15†	.16*	.67***	-				
肯定的相互作用	.18*	.18*	-.06	.21**	.03	-.07	-			
否定的相互作用	.06	-.02	.31***	.25**	.21**	.18*	.01	-		
お節介	.14†	.06	.26**	.24**	.24**	.13	.13	.90***	-	
退却	-.06	-.14†	.22**	.15†	.12	.12	-.25**	.78***	.46***	-

Note : *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

肯定的/否定的対人関係のストレス媒介効果

Table 6 分散分析結果の要約-独立変数・媒介変数の主効果と交互作用-

独立変数 (IV)	媒介変数 (MV)	従属変数								
		身体的症状			抑うつ			不安		
		IV	MV	Int.	IV	MV	Int.	IV	MV	Int.
ライフイベント	ネットワークサイズ	5.96*	.23	.14	8.73**	1.38	1.56	8.64**	.16	1.22
対人ストレス		8.25**	.14	.29	17.73***	1.69	.56	23.63***	.8	2.22
達成ストレス		5.65*	.11	2.31	8.73**	1.62	.00	9.82**	.71	3.60†
ライフイベント	サポートサイズ	5.67*	.77	2.52	6.91**	2.14	.07	8.43**	.98	.34
対人ストレス		8.35**	.30	.07	17.41***	2.33	.57	23.17***	1.26	.54
達成ストレス		5.99*	.80	1.50	8.86**	2.69	.03	9.88**	1.87	.88
ライフイベント	ストレインサイズ	7.62**	3.36†	10.34**	8.86**	.55	5.72*	8.07**	.98	3.32†
対人ストレス		7.30**	.78	1.42	16.75***	.01	1.23	21.53***	.19	1.32
達成ストレス		5.65*	1.77	.37	8.42**	.30	5.70*	9.51**	1.52	6.38*
ライフイベント	肯定的相互作用	7.46**	.82	.22	7.75**	1.40	1.53	8.44**	.08	.71
対人ストレス		8.16**	.18	3.27†	15.86***	.52	.96	21.43***	.33	.90
達成ストレス		6.11*	.06	.25	7.38**	.31	.06	8.52**	.53	.00
ライフイベント	否定的相互作用	2.90†	4.59*	.08	2.77†	11.13**	.00	3.87†	12.28**	.02
対人ストレス		6.57*	3.97*	1.22	12.41**	10.17**	.03	15.43***	11.40**	.11
達成ストレス		5.40*	4.54*	.03	7.66**	12.75***	.03	7.75**	14.12***	.40

Note : IV=Independent Variables : MV=Mediating Variables : Int.=Interactions
 数字はF値, df=(1, 154~165)
 ***p<.001 **p<.01 *p<.05 †p<.10

Table 7 否定的相互作用下位尺度の媒介効果

独立変数 (IV)	媒介変数 (MV)	従属変数								
		身体的症状			抑うつ			不安		
		IV	MV	Int.	IV	MV	Int.	IV	MV	Int.
ライフイベント	お節介	4.82*	1.30	.47	4.99*	7.88**	2.29	7.61**	5.22*	.81
対人ストレス		7.55†	.62	.18	13.85***	5.45*	.52	17.69***	3.54†	2.90†
達成ストレス		6.25*	1.87	.36	9.57**	9.56**	.01	8.54**	7.64**	1.08
ライフイベント	退却	3.54†	3.52†	.17	3.92*	10.38**	.00	4.33*	7.81**	.02
対人ストレス		7.82**	4.63*	5.11*	15.41***	12.94***	2.27	21.28***	10.59**	1.28
達成ストレス		5.19*	3.92†	.48	7.64**	13.06***	6.82*	9.72**	9.97**	2.34

Note : IV=Independent Variables : MV=Mediating Variables : Int.=Interactions
 数字はF値, df=(1, 157~162)
 ***p<.001 **p<.01 *p<.05 †p<.10

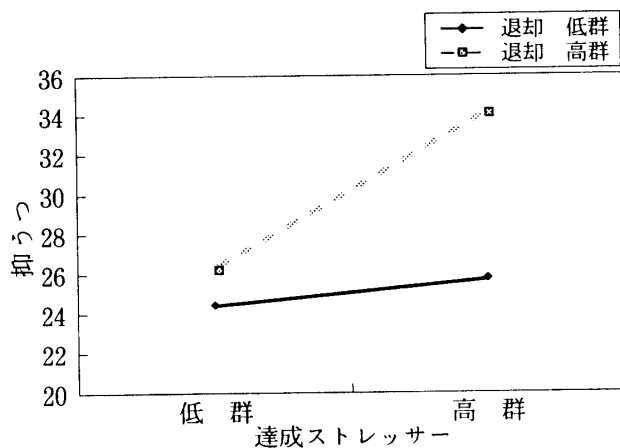


Figure 3 達成ストレス×退却による抑うつ

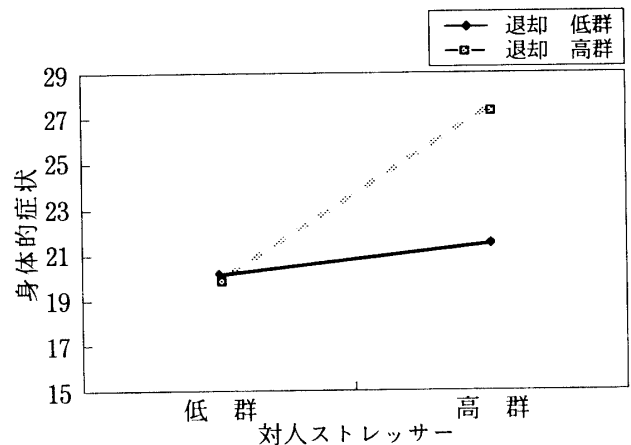


Figure 4 対人ストレス×退却による身体的症状

一般的に媒介（増幅）効果はほとんど見いだされなかった。

考 察

本研究では、①ストレス媒介要因としての否定的相互作用を測定する尺度の作成及びその下位概念の検討；②その尺度を用いての、知覚／実行された否定的対人関係のストレス媒介効果の検討；③それらと肯定的対人関係（ソーシャル・サポート）のストレス緩衝効果との相対的影響力；を検討することを主目的とした。以下、本研究の分析結果を踏まえて、これらの論点について考察する。

ストレス媒介相互作用尺度について

まず、否定的項目20項目による因子分析から、「お節介」と「退却」の2つの下位概念が見いだされたことは興味深い。これらは対人的相互作用における、「望まない干渉」と「望んでいる相互作用の非実現」という観点から区分できよう。対人葛藤研究における葛藤的相互作用の類型（Kelley, 1987）や、ソーシャル・サポート研究における否定的対人相互作用の類型（Shinn et al., 1984）に関する先行研究などで、否定的対人関係には（1）個人が望まない相互作用に従事している状況、と（2）個人が望む相互作用を実現できない状況、という2種類があることが指摘されている。本研究で見いだされたこの2因子もまた、これらの先行研究の知見と合致するものであり、対人関係が否定的となるのは、その在り方が各個人の理想水準より過剰もしくは過小であると認知されたときなのであろう。

また、これらの下位尺度と他の変数の間の相関によって、これらの構成概念妥当性・弁別的妥当性も、基本的には支持されたと考えられよう。例えば、「お節介」がネットワークサイズと正の相関を示したことは、「ネットワークが大きいほど、心理社会的ストレス過程に関与する対人関係の肯定的／否定的側面が共に大きくなる」という対人ストレス生起過程因果モデル（橋本, 1997a）と合致する知見である。「退却」が二つのサポート指標（サポートサイズ、肯定的相互作用）と負の相関を持つことも、「退却」が「期待されたサポートの不提供」であることを考慮すれば、妥当な結果であろう。また、「お節介」は対人ストレスと有意な正の相関を示したが、達成ストレスとは無相関であった。これは、対人ストレスが個人間の問題であるが故に介入を招きやすい一方で、達成ストレスは個人内の問題であるが故に介入しにくいことを示唆しているのではないだろうか。また、肯定的相互作用が「お節介」と（有意ではないが）正の相関、「退却」と有意な負の相関を示し

たことも、それぞれの概念弁別妥当性を支持する結果である。以上の結果から、今回作成された否定的相互作用の下位尺度は、信頼性、妥当性ともに確認されたと言える。ただし、本研究のデータは調査対象が女子短大生に限られており、本尺度の有効範囲については今後も検討する必要がある。

知覚／実行された否定的対人関係のストレス媒介効果

ストレスを独立変数、ネットワーク／相互作用を媒介変数、精神的健康を従属変数とした分散分析では、ストレスと否定的相互作用の直接効果が見いだされた一方で、ストレインサイズは増幅効果を示した。また、否定的相互作用の下位概念である「お節介」と「退却」を用いた同様の分散分析でも、ストレス及び否定的相互作用の主効果は見いだされたが、全般的に媒介効果はほとんど見いだされなかった。したがって、本研究の結果からは、「基本的に、知覚された否定的ネットワーク（すなわちネットワークストレイン）はストレスの悪影響を増幅する傾向があり、その一方で実行された否定的相互作用は、ストレスの影響を増幅はしないが、単独で精神的健康に悪影響を及ぼす傾向がある」と考えられる。

この結果は、ソーシャル・サポート研究における直接効果と緩衝効果についての一般の見解、すなわちCohen & Wills (1985) による「社会的包絡の程度が直接効果、サポート利用可能性が緩衝効果をもたらしやすい」とする知見と、一見矛盾するように思われる結果である。なぜなら、1) 社会的包絡とネットワークストレインは、ともにネットワーク特性に関する変数でありながら、前者は直接効果、後者は緩衝効果を示す傾向があるということになる；2) サポート利用可能性と否定的相互作用は、ともに相互作用に関する変数であるにもかかわらず、前者は緩衝効果、後者は直接効果を示す傾向があるということになる；からである。

しかし、指標の意味するところを正確に把握すれば、この結果は決して矛盾するものではない。その理由は以下のように説明できよう。まず、社会的包絡とはネットワークサイズを意味し、そこにそれ以上の意味は含まれない。それに対して、サポート利用可能性という概念には、サポートが実行される頻度や有効性のみならず、潜在的なサポート提供者が存在するという知覚も含まれる。そしてその意味において、ネットワークストレインは、社会的包絡よりもむしろ、サポート利用可能性と対をなす概念であると考えられる。すなわち、ストレスに直面したときに行われるネットワークに対する評価が、

ストレスの影響力を媒介すると考えれば、先行研究と本研究の知見は合致する。サポート利用可能性が高い（＝ネットワークが肯定的である）という認知がストレスを緩和し、逆にネットワークストレインが大きい（＝ネットワークが否定的である）という認知がストレスの増幅を導くのである。

また、否定的相互作用が直接効果を示した理由は、この変数がストレスそのものとしても機能しうることによって理解されよう。事前に別のストレスが存在するか否かを除けば、本研究で用いた否定的相互作用という変数は、対人ストレスと明確な差異はない。多少の例外はあるにせよ、何らかのストレスが存在する状態において行われた否定的相互作用は、既存のストレスの影響力を左右する要因としてよりもむしろ、新たなストレスの追加として捉えた方が基本的には妥当であろうことを、本研究の結果は示唆している。

否定的／肯定的対人関係のストレス緩衝効果の相対的影響力

否定的対人関係については、対人ストレスと否定的相互作用の直接効果、そしてストレインサイズの増幅効果が見いだされたが、その一方で、知覚／実行サポートについては、直接／緩衝効果ともに見いだされなかった。よって、ストレス媒介効果に関しても、多くの先行研究で指摘されているように、否定的対人関係の影響力は、肯定的対人関係の影響力を凌駕すると言えよう。ただし、多くのサポート研究で直接／緩衝効果が見いだされていることを鑑みれば、サポートの効果がまったく見いだされなかった本研究の結果は不自然であるかも知れない。今回このような結果となった原因は明らかではないが、これは検討すべき課題として残されている。また、肯定的であれ否定的であれ、対人関係のストレス媒介効果が、全般的に決して大きくはないであろうことを本研究の知見は示唆している。やはり、概念的にも計量的にも、一連のストレス過程において最も重要な変数はストレスそのものなのである。よって、ストレスの予防・抑制のためには、媒介要因として想定される諸変数よりも、まずはストレスの生起そのものを抑制する方向で議論を展開した方が、現実的にはより有効なのかも知れない。

その他

今回使用した諸変数の相関において、対人関係の肯定的／否定的側面の独立性が再確認された一方で、その方向性（肯定的か否定的か）が同じ変数は、測定形式を問わず共変することも確認された。よって、対人関係と精

神的健康の議論において、その肯定的／否定的両側面を視野に容れることは重要であるが、その測定形式に拘る必要性はあまりないであろうことも本研究は示唆していると考えられる。

また、ライフイベントが肯定的／否定的相互作用の両方と正の相関を示しているのは興味深い。ライフイベントはそのインパクトの大きさ故に他者にも可視的であり、その結果（肯定的であれ否定的であれ）他者介入を招きやすくなるのかも知れない。ストレスの種類によって対処方略が規定されることはこれまでも指摘されている（Compas, Malcarne, & Fondacaro, 1988; Mattlin, Wethington, & Kessler, 1990）。ただし、それらの指摘は、ストレスに直面している個人がストレスの種類によって対処方略を使い分けるということを意味しており、外部環境である他者はあくまで受動的な立場として位置づけられている。しかし、外部環境であるはずの他者も、実はストレスによっては、ストレスに直面している個人意思に関わらず、能動的にストレス対処に関わろうとするという解釈も可能である。つまり、従来のストレス理論では一般に、「個人が利用し得る外的資源」としてネットワークを受動的に位置づけているが、実はストレスの種類によって、ネットワークが能動的に、他者のストレス過程に関与してくる可能性は十分考えられよう。このような「ある人が直面したストレス（の種類や性質）が、（本人ではなく）周囲の人々に及ぼす影響」は、今後検討されるべき興味深い課題ではないだろうか。

引用文献

- Abbey, A., Andrews, F.M., & Halman, L.J. 1995 Provision and receipt of social support and disregard: What is their impact on the marital life quality of infertile and fertile couples? *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 455-469.
- Abbey, E., Abramis, D.J., & Caplan, R.D. 1985 Effects of different sources of social support and social conflict on emotional well-being. *Basic and Applied Social Psychology*, 6, 111-129.
- Antonucci, T.A. 1985 Social support: Theoretical advances, recent findings and pressing issues. In I.G.Sarason & B.R.Sarason(eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*.

- Martinus Nijhoff Publishers. Pp.21-37.
- Barrera, M., Jr. 1986 Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Barrera, M., Jr., Chassin, L., & Rogosch, F. 1993 Effects of social support and conflict on adolescent children of alcoholic and nonalcoholic fathers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 602-612.
- Barrera, M., Jr., Sandler, I.N., & Ramsay, T.B. 1981 Preliminary studies of a scale of social support: Studies on collage students. *American Journal of Community Psychology*, 9, 435-447.
- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R.C., & Schilling, E.A. 1989 Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 808-818.
- Cohen, S. & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Compas, B.E., Malcarne, Y.L., & Fondacaro, K.M. 1988 Coping with stressful events in older children and young adolescents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 56, 405-411.
- Coyne, J.C. & DeLongis, A. 1986 Going beyond social support: The role of social relationships in adaptation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54, 454-460.
- Finch, J.F., Okun, M.A., Barrera, M., Jr., Zautra, A.J., & Reich, J.W. 1989 Positive and negative social ties among older adults: Measurement models and the prediction of psychological distress and well-being. *American Journal of Community Psychology*, 17, 585-605.
- Fiore, J., Becker, J., & Coppel, D.B. 1983 Social network interactions: A buffer or a stress. *American Journal of Community Psychology*, 11, 423-439.
- 橋本 剛 1997a 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 橋本 剛 1997b 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 1999 対人関係の両価性と精神的健康の関連—その否定的側面を中心に— 名古屋大学教育学研究科博士学位論文 (未公開)
- Helgeson, V.S. 1993 Two important distinctions in social support: Kind of support and perceived versus received. *Journal of Applied Social Psychology*, 23, 825-845.
- Hewitt, P.L., & Flett, G.L. 1993 Dimensions of perfectionism, daily stress, and depression: A test of the specific vulnerability hypothesis. *Journal of Abnormal Psychology*, 102, 58-65.
- Holahan, C.J., Moos, R.H., Holahan, C.K., & Brennan, P.L. 1997 Social context, coping strategies, and depressive symptoms: An expanded model with cardiac patients. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 918-928.
- Holmes, T.H., & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- Horwitz, A.V., McLaughlin, J., & White, H.R. 1997 How the negative and positive aspects of partner relationships affect the mental health of young married people. *Journal of Health and Social Behavior*, 39, 124-136.
- House, J.S., Landis, K.R., & Umberson, D. 1988 Social relationships and health. *Science*, 241, 540-545.
- Kelley, H.H. 1987 Toward a taxonomy of interpersonal conflict processes. In S.Oskamp & S.Spacapan (eds.) *Interpersonal Processes*. SAGE Publications, Inc. Pp.122-147.
- Lakey, B., Tardiff, T.A., & Drew, J.B. 1994 Negative social interactions: Assessment and relations to social support, cognition, and psychological distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 42-62.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer. (R.S.ラザルス・S.フォルクマン著 本明 寛・春木 豊・織田正美監訳 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版)
- Lepore, S.J. 1992 Social conflict, social support, and psychological distress: Evidence of cross-domain buffering effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 857-867.

- Major, B., Zubek, J.M., Cooper, M.L., Cozzarelli, C., & Richards, C. 1997 Mixed massages: Implications of social conflict and social support within close relationships for adjustment to a stressful life event. *Journal of Personality and Social Psychology*, *72*, 1349-1363.
- 松崎 学・田中宏二・古城和敬 1990 ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果 実験社会心理学研究, *30*, 147-153.
- Mattlin, J.A., Wethington, E., & Kessler, R.C. 1990 Situational determinants of coping and coping effectiveness. *Journal of Health and Social Behavior*, *31*, 103-122.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, *39*, 182-185.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, *63*, 310-318.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクションな分析に向けて— 久留米大学大学院比較文化研究科年報, *1*, 95-114.
- Pagel, M.D., Erdly, W.W., & Becker, J. 1987 Social networks: We get by with (and in spite of) a little help from our friends. *Journal of Personality and Social Psychology*, *53*, 793-804.
- Pierce, G.R., Sarason, I.G., & Sarason, B.R. 1991 General and relationship-based perceptions of social support: Are two constructs better than one? *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 1028-1039.
- Rauktis, M.E., Koeske, G.F., & Tereshko, O. 1995 Negative social interactions, distress, and depression among those caring for a seriously and persistently mentally ill relative. *American Journal of Community Psychology*, *23*, 279-299.
- Rook, K.S. 1984 The negative side of social interaction: Impact on Psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, *46*, 1097-1108.
- Rook, K.S. 1985 The functions of social bonds: Perspectives from research on social support, loneliness and social isolation. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers. Pp.243-267.
- Sandler, I.N. & Barrera, M., Jr. 1984 Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, *12*, 37-52.
- Sarason, I.G., Levine, H.M., Basham, R.B., & Sarason, B.R. 1983 Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, *44*, 127-139.
- Sarason, I.G. & Sarason, B.R. (eds.) 1985 *Social Support: Theory, Research and Applications*. Martinus Nijhoff Publishers.
- Schuster, T.L., Kessler, R.C., & Aseltine, R.H., Jr. 1990 Supportive interactions, negative interactions, and depressed mood. *American Journal of Community Psychology*, *18*, 423-438.
- Shinn, M., Lehmann, S., & Wong, N.W. 1984 Social interaction and social support. *Journal of Social Issues*, *40*, 55-76.
- Suh, E., Diener, E., & Fujita, F. 1996 Events and subjective well-being: Only recent events matter. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 1091-1102.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, *14*, 12-24.
- Thoits, P.A. 1982 Conceptual, methodological, and theoretical problems in studying social support as a buffer against life stress. *Journal of Health and Social Behavior*, *23*, 145-159.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学— サイエンス社
- Vinokur, A.D., Price, R.H., & Caplan, R.D. 1996 Hard times and hurtful partners: How financial strain affects depression and relationship satisfaction of unemployed persons and their spouses. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 166-179.
- Vinokur, A.D. & van Ryn, M. 1993 Social support and undermining in close relationships: Their independent effects on the mental health of unemployed persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 350-359.

渡辺直登 1986 職務ストレスとメンタル・ヘルス—職務ストレス・チェックリスト作成の試み— 南山経営研究, 1, 37-63.

Wortman, C.B. & Lehman, D.R. 1985 Reactions to victims of life crises: Support attempts that fail. In I.G.Sarason & B.R.Sarason (eds.), *Social Support: Theory, Research and*

Applications. Martinus Nijhoff Publishers. Pp.463-489.

八尋華那雄・井上真人・野沢由美佳 1993 ホームズらの社会的再適応評価尺度 (SRRS) の日本人における検討 健康心理学研究, 6 (1), 18-32.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Stress mediating effects of positive and negative interpersonal relationships

Takeshi HASHIMOTO

The purposes of this study are to develop a scale for measuring positive/negative interaction which may mediate stress, to examine effects of perceived/enacted negative interpersonal relationships on mental health, and to compare effects of these negative interpersonal relationships and social supports on mental health. Investigations were administrated by three wave longitudinal study. A hundred and seventy female undergraduates completed questionnaires. Following results were found that: 1) The stress mediating interaction scale divided into two subscales, positive interaction (as enacted support) and negative interaction. And negative interaction scale included two subscales, meddlesomeness and withdrawal. Construct validity and reliability of these scales were generally supported. 2) Both interpersonal stressors and negative interactions showed main effects, while network strain showed stress amplifying effects. 3) Neither main effect nor buffering effects of perceived/enacted support were found. 4) It was reconfirmed that negative/positive aspects of interpersonal relationships are independent, and variables which have same positive-negative vector covaried nevertheless form of measures.

Key words : negative interactions, social support, positive / negative relationships, stress amplifying effects, mental health